

伊井野ミコは向き合いたい（あるいは、石上優は向き合いたい）

瑞穂国

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「伊井野、アガリ症を治せ」

夏休み直前、生徒会長に立候補する伊井野に対し、白銀はそう指示をして、石上にも手伝うように提案する。二人は早速、アガリ症克服のための、特訓を開始する。

夏休みが明け、いよいよ選挙の日がやつて來た。一人壇上に立つ伊井野を、石上は見守る。

伊井野ミコ、そして石上優。向き合えない二人の、正義と願いのお話。

※およそ1年ぶりの石ミコ小説です。選挙戦妄想。

目 次

伊井野ミコは向き合いたい（あるいは、石上優は向き合いたい）

1

伊井野ミコは向き合いたい（あるいは、石上優は向き合いたい）

「伊井野。一つ、確認なんだが」

いつになく真剣な白銀の声に、石上はキーボードを打つ手を止めて、顔を上げた。

生徒総会を終えた、放課後の生徒会室。今日の分の仕事を終えて、帰宅しようとした伊井野を、生徒会長の机から、白銀が呼び止めていた。

鞄へ伸ばしかけていた手を引っ込めて、伊井野が白銀を振り返る。「はい。なんですか？」

会長の証たる純金飾緒を微かに揺らして、白銀は伊井野に尋ねた。「お前、生徒会長になる意志は、変わっていないか？」

一瞬、ピンと、生徒会室の空気が張り詰めるのを、石上は感じていた。

生徒総会が終われば、生徒会でやる仕事はほとんど残っていない。夏休みが明けてしまえば、すぐに選挙だ。そこで、白銀に替わる、次の生徒会長が決定する。

だからこそ、この生徒会室にいる誰もが、伊井野の動向を気に掛けている。それと同時に、誰もが切り出せずにいた。

伊井野はまだ、生徒会長になるつもりがあるか、否か。

問われた伊井野に、少しの間があつた。しかしすぐに、やや幼さの残る顔が、覚悟を決める。

「——はい。会長選に、出馬します。今でも、生徒会長になる意志は、変わつてません」

「……そうか」

それだけ確認できればよし、そう言うように、白銀が頷く。口を挟まなかつた四宮と藤原も、同調するように首肯していた。

「なら——」

ここからが本題だ。白銀は両手を組むと、一層鋭い視線を、伊井野

へ向ける。それは、目の前の女生徒へ自分の後を託したいという、先輩としての期待のように、石上には見えた。

「伊井野。アガリ症を治せ」

——やつぱり、そうなるよな。

白銀の言うことにある程度予想のついていた石上は、しかしそれがどれほど難しいことかも、同時に理解していた。

伊井野が一瞬、息を飲んだ。彼女自身も、いつか、この指摘を受けるだろうと、覚悟していたはずだ。だから後退のことなく、震える両手を拳に変えて、白銀を見つめている。

白銀の言葉は、なおも続く。

「伊井野に生徒会長を任せることに、異存はない。お前は確かにビジョンを持っているし、仕事もできる。伊井野が生徒会長を務めてくれるなら、俺たちも安心して、後を任せられる。だが——」

そこで一度、白銀は言葉を切つた。少し厳しいことを言うぞと、その蒼い瞳が語っている。

伊井野は口を閉ざしたまま、白銀の言葉を聞いていた。

「お前には、自分の意見を、他人に伝える能力が足りていない。生徒会長になれば、部活や委員会、各所との折衝もあるし、生徒を代表して意見を求められることも多い。大勢の前で話すこともざらだ。——だから、伊井野。アガリ症を治せ」

確認と念押しのためか、白銀はもう一度そう言つて、言葉を止める。その両目が、現会長としての目が、静かに伊井野を見つめていた。ごくり。思わず、石上の方が、息を飲んでしまう。

伊井野は、すぐには何も言わなかつた。動搖した様子で、丸い瞳が揺れて、視線が宙を彷徨う。何度か口を開きかけ、その度に息を飲んで、唇を閉じる。覚悟は決まついても、それを言葉にできない。そんな感じだった。

たっぷり十秒ほどをかけて、伊井野がようやく、白銀に答える。

「……わかり、ました。頑張ります」

首肯した白銀が、今度は石上の名前を読んだ。呆然と事の成り行き

を見守っていた石上は、ハツと我に返つて返事をする。我ながら、変な声が出た。

「伊井野を手伝ってくれ。石上は、去年の俺の選挙も経験してるし、色々とアドバイスもできるだろう」

「僕は、構いませんけど……」

石上はチラリと、伊井野を窺う。

生徒会で、活動を共にすること、まもなく一年。以前よりは良好な関係を築けていると思ってるが、依然反目することの多い同級生だ。向こうは相変わらず、こちらを不良認定してくるし、正直よく思われてるとは思えない。それに、伊井野の性格まで考えれば――

――伊井野は、僕にあれこれ言われるの、嫌なんじや……。

石上の手助けなんていらない。そんなセリフが飛び出すのではと、石上は大真面目に考えていた。

白銀を見つめたまま、伊井野は澄ました風に、答える。

「石上、よろしく」

「……お、おう」

珍しく素直に協力を良しとした伊井野に、こちらの方が面食らつてしまつた。

「それじゃあ、よろしく頼む」

安心したように相好を崩す白銀。そんな彼にきつちりと一礼して、伊井野は生徒会室を去つて行つた。

次の日から、伊井野のアガリ症を治す特訓が始まった。残つた一学期の数日間、さらに夏休みに入つても、伊井野は毎日のように、アガリ症を克服しようと頑張つていた。もちろん、その全てに、石上は付き合つた。

当初の予想通りというか、いつも通りというか、相も変わらず、伊井野とは衝突ばかりの日々であつた。それもそうだ。顔を合わせる度に、やれゲームを持ち込むなのだ、やれえっちな漫画を読むなのだ、やれ髪がぼさぼさだの、やれ制服の着こなしがなつてないだの、事細かに指摘してくる奴だ。考え方とか、そういうもの以前に、決定的に

そりが合わないのだ。

別に、嫌いなわけじゃない。むしろ、これまでの活動を見てる分、人間としては好ましくさえある。だがそれでも、合わないものは合わないのだ。お互いに、磁石のN極でもついているのではと、そんなことを石上は考えた。

長いようで短い夏休みは、あつという間に過ぎていった。二学期も始まつて少しすれば、第六八期生徒会は解散し、いよいよ選挙期間に突入した。

選挙活動を行いつつ、伊井野のアガリ症対策は続いていた。伊井野は忙しい人間だ。生徒会活動が無くなつても、風紀委員は続けてい。る。必然的に、二人の練習時間は、伊井野が放課後の見回り活動を終えてからになつた。

原稿を何度も推敲し、実際に発声して、録音を見直す。伊井野らしきというべきか、彼女は決して腐ることなく、自分の納得いく仕上がりになるまで、何度も練習していた。さらに、進学や受験の準備の合間に縫つて、白銀や四宮、藤原といった前生徒会メンバーも、選挙戦のアドバイスへ駆けつけてくれた。そうなると、単にアガリ症の克服のみならず、公約の見直しや、アピールすべき実績の洗い出し、賛同してくれる委員会・部活動への根回しなど、やることは膨れ上がる一方だつた。

二人の帰りは六時を過ぎることも珍しくなく、石上はその度に、伊井野を家まで送り届けた。その道中も、二人の会話は、やれ発声がどうだの、言葉のチョイスがどうだの、坊主はかつこいいだの、選挙に關する内容ばかりであつた。

濃密な時間は、夏休みよりもさらにあつという間に過ぎ去り。いよいよ、選挙当日を、迎えたのだった。

「——そりは言つても、無理な話なんですよ」

相も変わらずたどたどしい演説を披露する壇上の伊井野を見つめ、石上はポツリ、隣の人間にだけ聞こえるように呟いた。

各候補の応援演説(ちなみに、伊井野の応援演説は藤原が務めた)が

終わり、選挙戦も大詰め。候補者たちのトリを飾るのが、前生徒会メンバーでもある伊井野だった。

白銀に言われて、すでに二か月以上。できうる限りのことはやつて来たし、実際去年に比べれば、伊井野のアガリ症は随分とマシになつただろう。

だが、ことはそう上手く行かないと、石上は——そしておそらく伊井野も、隣の白銀も、わかつていたはずだ。

「伊井野のアガリ症は、たつた二か月で治せるような、そんな単純なものじやないんですよ。……伊井野は、悪意に晒されすぎた」

選挙の度、伊井野は何度も、他人の惡意の目に晒されてきた。それこそ、小等部の頃から、何度も、何度も——謂れなき惡意に、晒されてきた。正しくあろうとしただけなのに、正しくあろうとすればするほど、鋭利な視線に串刺しにされてきた。

伊井野は、正しすぎるのだ。あの小さな体で、どこまでも純粹に、ただただ真っ直ぐに、立ち続けているのだ。逃げても責める奴なんていないのに、避けることもせず、視線の矢衾に晒されてきた。何年も、何年も……

本来、あの壇上に立てていることが、おかしいのだ。用意した原稿を、何十と読み返した原稿を、皺になるほど握り締めて、それでも立つているのだ。

「……伊井野はもう、誰かの前で、まともにしゃべることは、一生できないかもしない」

数年間に亘つて受けてきた傷は、たつた二か月やそこらの努力で、癒えるものなんかじゃない。もつと根本的な部分が、伊井野のアガリ症の原因だ。

だから、伊井野ミコは、語れない。今までも、これからも。

「……どうかもしないな」

白銀は否定しなかつた。夏休み前と同じ、鋭い蒼の瞳が、ただ真っ直ぐに伊井野を見ている。壇上で、声を震わせながら演説を続ける後輩を、見定めるように。

同じ目が、一瞬だけ、石上の方を見た。

「人に、世界に、正しくあつてほしい。そのためには努力を惜しまない彼女の姿勢は、絶対に間違つてない。そのはずなんだがな」

白銀の言う通りだ。石上もそう思つている。

確かに、伊井野には恨みもある。あのくそ眞面目っぷりは、どうにかならんもんかと、常々思つてゐる。ゲームの一つ、漫画の一冊、それくらい許してくれてもいいだろう、と。

だが、その頑張りだけは、直視し、評価するべきだ。誰よりも朝の早い彼女を、誰よりも勉学に勤しむ彼女を、誰よりも生徒と学校に尽くす彼女を、その全てを、小さな体と、震える勇氣で成し遂げてしまう彼女を、認めるべきだ。その努力を、心無い言葉で貶めるなど、あつてはならない。

正しい奴は、頑張つてゐる奴は、誰からも正しく評価されてほしい。努力は報われてほしいし、幸せになつてほしい。石上はそう願つている。

その願いに照らし合わせれば、例えどれ程そりの合わない奴と言えど、伊井野ミコこそ、一番評価され、幸せにならなければならない人間なのだ。

だからこそ、苛立つた。ムカついた。頑張つてゐる伊井野が、評価されず、幸せになれず、それどころか笑われてゐる、現実に。

だが――

「……だが一つだけ、彼女のアガリ症を治す方法が、あるかもしけない」

白銀の言葉には、どこか確信めいた響きがあつた。

頷いた石上は、改めて、今回の選挙戦を振り返つた。

色々アドバイスをしたとはいゝ、伊井野の基本的なスタンスは、これまでと変わらない。「この学校をよりよくするために、考える機会を生徒たちに与える」、その考えの元、公約を掲げ、チラシを配り、ポスターを掲示する。

ただ、去年までと違つたのは。

――「公約です、よろしくお願ひします」  
――「ご一読ください」

——「伊井野ミコの公約です」

——「一緒にこの学校をよくしていきましょう」

伊井野ミコは、一人ではなかつた。休み時間の度、生徒が入れ代わり立ち代わり、伊井野のところへ現れた。「何か手伝えることはない?」「チラシ、一緒に配りましよう!」「ポスター貰える? 部室棟にも貼つてもらうよ」、そんな風に声を掛けられていた。

部活動への根回しで訪れた美術部での出来事を、石上は思い出す。

——「伊井野さんのためなら、喜んで協力するよ!」

伊井野のファンだという女生徒は、協力を快諾していた。チラシやポスターのデザインも、彼女を中心に美術部が全面協力してくれたものだ。

——「私、去年の伊井野さんの演説を聞いて、感動しちゃつた。こんなに、学校や生徒のことを考えて、一生懸命になれる人がいるんだ、つて。だから、伊井野さんのために、私も頑張るね」

伊井野は嬉しそうに笑つて、何度も何度もお礼を言つていた。あるいはその横顔には、涙すら浮かんでいたかもしれない。

伊井野ミコは、一人ではなかつた。

「今は、彼女の信念を、正義を、理解してくれる人がいます。伊井野の頑張りを、評価して、応援してくれる人がいます」

石上の言葉に、今度は白銀が頷いた。

伊井野ミコは語れない。この二か月でトラウマは解消されず、アガリ症は克服できなかつた。彼女はまだ、自分の言葉で、自分の正義を、信念を、語れない。

だからこそ、伊井野ミコを語りたい。頑張っている人のために、協力してあげたい。彼女が語れない分まで、彼女の正義を、信念を、語りたい。

これはお節介だ。とんでもない自己満足の、お節介。一人で頑張ってきた伊井野の考え方とは、相容れないものかもしれない。見返りを求めなかつた彼女の正義とは、根本的に違う考え方かもしれない。

それでも、頑張っている人のためになら。感謝したい、力を貸したい、その努力が報われてほしい。そう思うのが人間だ。

つまるところ、順番が逆だつたのだ。伊井野ミコに必要だつたのは、アガリ症を治すことではなく。彼女の信念を理解し、考えに賛同し、共に歩んでくれる、協力者だ。

「……会長は、そういうことを、言いたかつたんですね。だから僕に、伊井野のアガリ症を治すのを手伝うように、指示した」「……まあ、な」

白銀の返答は、わざと明言を避けていようであつた。

「まあ、なんだ。可愛い後輩への、最後のお節介だと、思つてくれ」照れと罪悪感をない交ぜにした声で頬を搔く、白銀。

「伊井野ミコは正しい。だが、正しいだけではダメだと、俺は思つていい。大切なのは、一緒に戦ってくれる人間を作ることだ。——少なくとも、俺はそうやつてきた」

「会長も?」

「おう。俺だけじゃ生徒会は、回らなかつた。四宮がいて、藤原がいて、石上が入つて、伊井野が加わつて。……皆がいたから、俺はここまでやつて来れた」

壇上を見つめる白銀の目が、優しい。石上も作成に協力した演説用のスライドは、最後から三枚目まで進んでいた。もうすぐ、伊井野の演説が終わる。

白銀は、さらに続ける。

「一人で頑張ることを、悪いとは言わん。そんな風に頑張れる奴は、本当にすごいと思う。自分の正しさのために、誰かを巻き込みたくないという考え方も理解できる。——だけど、誰かを頼ることは、決して、悪いことじやない」

それを、伊井野にも知つてほしかつた。白銀はそこまで語つて、口を開ざした。

——確かに、それはお節介ですね、会長。

だけど、それは多分、石上がいつも伊井野に抱く苛立ちと、似たようなものだ。

とかく、人は善意よりも悪意を敏感に感じがちだ。百の称賛も、一の批判に塗り潰される。そもそも、世の中のシステムというのは、称

賛より批判を拾いややすくできている。

伊井野を蝕んできた悪意の目。しかし中には、埋もれてしまつた、彼女を応援する目もあつたはずだ。例えば大仏こばちのように。あるいは今の小野寺麗のように。……もしかしたら、石上優のように。そして今なら、さらに多くの目が、伊井野を応援している。

——「がんばれ」

——「ガンバレ」

——「頑張つて」

祈るような応援の視線を、会場の中に、いくつも感じる。

悪意だけではない。自らを認め、応援してくれる目があるのだと気づければ。あるいは伊井野のアガリ症は、治るかもしない。もちろん、それにはきっと、想像もつかないほど、途方もない努力と時間が必要になるだろうが。

伊井野ミコに語つてほしい。いつか、彼女の口から、彼女のことを、直接、聞かせてほしい。

「……大丈夫、だと思います。今の伊井野なら、きっと大丈夫です」

全く、根拠なんてない確信だ。無責任な期待だ。

だけど。

——「ありがとう、皆」

その笑顔だけで、十分だ。誰かと手を取り合えるようになつた伊井野は、最強なのだから。

演説は、いよいよ最後の挨拶になつた。これまでの主張をまとめつゝ、伊井野は改めて、生徒会長への想いを、覚束ない言葉で語つている。

「よくやつてくれた、石上」

白銀の咳きに、石上はかぶりを振つた。

「いえ、僕は何も。伊井野が頑張つてただけですから」

石上の回答に、白銀は苦笑する。

「全く、似た者同士だな、石上。——他人からの感謝は、素直に受け取つておくものだぞ」

それが、先輩・白銀御行からの、最後のアドバイスだつた。

『——ご清聴、ありがとうございました』

演説を終えた伊井野が、そう言つて一礼する。壇上へ向け、温かい拍手が送られた。

次期生徒会長は、伊井野ミコに決まった。

張り出された得票数を囲む生徒たちの間で、黄色い歓声が起ころる。拳を突き上げる者、万歳と叫ぶ者、おめでとうと涙する者。その輪の中心で、たくさんの生徒にもみくちゃにされながら、伊井野は笑っていた。

中庭のど真ん中で胴上げを始めようとする生徒たちを、大仏と共に何とか止めた石上は、伊井野に連れられて体育館の裏へとやつてきた。

もみくちゃにされた髪を整えて、伊井野は深々と頭を下げる。

「ありがとうございます、石上。あんたのおかげで、生徒会長になれた」

何もしてない。そう言いかけて、白銀の言葉が脳裏をよぎった。他人からの感謝は、素直に受け取るように、という先輩からのアドバイス。

口を噤み、頬を搔く。照れが勝つて、頭を下げる伊井野を、どうしても直視できない。

「……どういたしまして。——よかつたな、伊井野。生徒会長になれ

て」

それだけ、なんとか口にすることができた。

顔を上げた伊井野は、一瞬驚いた表情を浮かべて、けどすぐに、微笑んで頷いた。

「うん。石上が——皆が、たくさん、助けてくれた」

伊井野も照れくさいのか、やや俯き加減の顔は、夕陽に当てられたわけでもなく、赤い。それでも、その微笑みは、とても晴れやかなものに、石上には映つた。

「私、ずっと、一人で頑張らないとつて、思つてた。私が生徒会長になりたいのは、私が思い描く、正しい秀知院学園にしたかったから。だ

から、誰も頼っちゃいけないって、思つてた」

だけど。伊井野は言葉を切る。上目遣いの目が、それまでにも増して、柔らかく、優しい。

こちらこそが、本来の伊井野ミコだと、いい加減石上も気づいている。引き締まつた目も、笑わない瞳も、彼女が振り絞つた勇気の結果だ。文化祭で見たあの笑顔こそが、あるいは生徒会室で見せた笑顔こそが、きっと、伊井野の素の部分だ。

今は、少しずつ、少しずつ、伊井野も他人と笑えるようになつた。校内でも、あの笑顔を見かけるようになつた。それを、石上は好ましく思う。

伊井野ミコに、笑つてほしい。それもまた、石上の願いである。「嬉しいね、石上。誰かと一緒に頑張るのも、一緒に笑つて、喜んでくれるのも——すごくすごく、嬉しいね」

「——ああ、そうだな」

伊井野がそんな風に笑えるのなら。石上もやぶさかではない。つい、口元を綻ばせてしまうくらいには、嬉しいことだ。

一しきり微笑んだ後、伊井野は咳払いを一つ、挟んだ。一転して、不安げな表情が、しばらく言葉をまとつかせる。

「それで、ね。石上に、お願ひが、あるんだけど

「……ん。なんだよ」

その先を、伊井野はさうに言い淀む。普段、あんなにぶれない彼女の目が、右へ左へと泳ぐ。

やがて、意を決して、伊井野は口を開いた。

「い、石上に、生徒会に入つてほしいの」

思いもかけない言葉に、石上は目を見開く。

伊井野はなおも言い募る。

「石上、一年生の時から生徒会に入つてるし。そういう、経験豊富な人つて、あんたしかいないし。私も、生徒会経験者が近くにいた方が、安心できるつていうか」

やたら早いセリフを、なんとか聞き取つた。それでも、すぐに言葉が出てこない。

伊井野はもう一度、気合いを入れるように、念を押すように、懇願するように、こう言つた。

「——私には、石上が必要なのつ。だから、お願ひ。私を手伝つて。生徒会に、入つて」

掠れて途切れた声を残し、伊井野は再び俯いた。想像以上に小さな肩が、石上の目線よりずっと低い位置で、震えている。

多分、これが、伊井野にとつては初めて、他人を頼る言葉なのだ。自分の正しさに、信念に、付き合つてくれと、懇願する言葉なのだ。

——僕で、いいのかよ。

嬉しくないわけがない。他人を頼つてほしいと願つていた人が、思いもかけず自分を頼つてくれるというのなら、嬉しくないわけがない。

だからこそ、その相手が自分でいいのかと、そんなことを考えてしまう。

なんで、僕なんだ。そんなことを尋ねそうになつて、口を閉じる。それは今、伊井野が散々、語つてくれたことだ。伊井野はすでに、必要なことは全て、述べている。応えるか否か、それはもう、完全に石上へ託された。

伊井野は今、向き合おうとしている。恐らく初めて、自分以外の誰かと。彼女の正しさを、共有できないかもしれない正しさを、震えながら差し出している。

なら、その勇気に応えなければ、嘘だ。

「……まあ、会長にも、四宮先輩にも、藤原先輩にも、託されたし」  
ああ、違う。これじやない。そう思つて、頭を振る。言い訳はなし  
だ。それは誠実じやない。

「……生徒会は、僕にとつて、初めてできた居場所なんだ。——だか  
ら、伊井野。こんな僕によければ、どうか生徒会に入れてほしい」  
頭を下げるのは、石上の方だった。

伊井野があたふたとしているのがわかつた。視線の端で、膝下まで伸ばしたスカートが揺れている。

「か、顔を上げてっ」

伊井野に言われて、ようやく、顔を上げる。真っ赤になりながら、頬を膨らませる伊井野が、そこにはいた。タコみたいだと思ったことは、黙つていよう。

「お願いしたのは、私なのに」

「不満ポイントはそこかと、内心で苦笑する。本当に、律儀で、真面目で、融通が利かない、同級生だ。

コホンと、咳払いを一つ。

「……それで、」

いまだ頬を膨らませている伊井野を、笑いを堪えながら、石上は真っ直ぐに見据える。

「僕は何をしたらいい——伊井野会長？」

これで、いいだろうか。僕を頼つてくれた伊井野に、初めて応える回答として、これでいいのだろうか。

伊井野の顔が、パツと明るくなつた。遙かな雲居から、隠されていた太陽が顔を出すように。時たま見かけるようになつたあの笑顔で、伊井野は何度も頷いた。

「——それじゃあ、生徒会の初仕事。会場の椅子、片しに行くわよ」「どこかで聞いたようなセリフに、石上は頬を緩める。

二人揃つて、体育館へと戻つていく。何だか初めて、伊井野ミコという女生徒と、向き合えた気がした。